

#### 4. タバコ等跡作中苗移植栽培耕種基準

項 目	要 点	実 施 内 容
1. 品 種		晩植適性の高い品種を用いる。
2. 育 苗		
(1) 播種期	育苗日数は約25日とする	中苗を原則とし、移植の約25日前に播種する。 育苗日数がこれより長くなると、苗質が劣化し、収量の低下を招くおそれがあるので、移植時期を予め設定し、播種時期を決定する。
(2) 床土の準備及び施肥	施肥は無施用とする	基肥は無施用とする。
(3) 種子量及び種子予措		10a当たり必要種子量は、乾燥籾で3.0～3.5kgであり、種子予措は稚苗移植栽培に準じる。
(4) 育苗箱		10a当たり必要箱数は30～35箱である。 (1)無孔底育苗箱は、苗の生育ムラが少ないが、下部からの吸水が劣り乾燥しやすいため水管理に注意する。 (2)2～3mm角の穴が1cm <sup>2</sup> に1個ある多孔底育苗箱使用の場合は、そのまま土入れを行う。 (3)5mm角の穴が1cm <sup>2</sup> に1個ある多孔底育苗箱使用の場合は、新聞紙を1～2枚敷き込んでから土入れを行う。
(5) 播 種	播種量は乾燥籾で箱当たり100gとし、均一にまく	1箱当たり播種量は乾燥籾で100gとし、均一に播種する。灌水は播種前または播種後に十分に行う。覆土は籾がかくれる程度にする。
(6) 管 理	徒長防止に留意し、追肥重点の管理を行う	(1)覆土を終了した育苗箱は、揚床苗代に設置するか、出芽施設を利用して出芽させる。露地出芽の場合は、雀害、降雨に注意し、白寒冷紗をトンネルにして被覆する。施設利用の場合は、出芽後できるだけ早く上記の苗代に設置する。 (2)水管理は溝湛水でよいが、乾燥が著しい場合は、時々床上まで湛水する。常時深水湛水状態では、徒長、軟弱化を助長するので注意する。 (3)追肥は生育状態を見て適宜施用するが、2葉期、3葉期、移植3日前を目安とし、100倍程度の液肥で1箱当たりN成分0.5g(1回の量)を灌注する。 なお、追肥は土を乾き気味にして施用した方がよい。
	いもち病、萎縮病の防除を徹底する	(4)病虫害防除は下記の要領で行う。 ①苗いもちの防除 種子消毒を行うと共に、施肥を適正に実施する。育苗箱での覆土が不十分で、籾が露出している場合には発生しやすいので完全に覆土する。 ②ツマグロヨコバイ(萎縮病)の防除 育苗箱周辺に寒冷紗を張って媒介虫の飛び込みを防ぐ。 他は早期栽培に準じる。

項 目	要 点	実 施 内 容
3. 本田の耕起・代かき		<p>(1) 前作物の収穫が終わり次第、遅くとも移植2週間前までに畑状態で耕起し、前作物の残さを鋤込むか、できれば圃場外へ搬出する。同時に残さの腐熟化の促進と跡作水稻の生育健全化を目的にケイカルを10a当たり200kg施用する。</p> <p>(2) 耕耘回数は、代かきを含めて3回耕でよい。</p> <p>(3) 代かきは、均平を重点に置く。特に前作物の残さがある場合、丁寧に行い埋没するように留意する（浅水で代かきを行うと埋没効果が高い）。</p>
4. 施 肥		<p>(1) 露地野菜跡や甘藷跡で残さの鋤込みを行った場合は、基肥は施用しない。</p> <p>(2) タバコ跡作水稻では、基肥窒素は10a当たり3～4kgとする。</p> <p>(3) 施肥様式は、一般には全量基肥方式でよいが、生育状況に応じて穂肥を施用する。</p> <p>(4) 穂肥は、窒素成分で1～2kgを目安とし、出穂前20～25日に施用する。</p>
5. 移 植 (1) 移植時期 (2) 栽植密度	<p>なるべく早植する</p> <p>密植が望ましい</p>	<p>7月中旬～下旬</p> <p>1株苗数4～5本となるよう田植機のかき取り量を調節し、できるだけ密植（25株/m<sup>2</sup>）とする。</p>
6. 除 草	<p>適期に均一に散布する</p>	<p>(1) 除草剤は、効果・安全性の面から使用時期・使用量が決められており、その範囲内で使用する。</p> <p>(2) 雑草の発生は代かき後の気温によって異なるが、高温条件では、使用時期の範囲で早めに使用する方がよい。</p> <p>(3) 残さ鋤込田では、藻類の発生が多くなることがある。</p>
7. 水管理	<p>間断灌がいと中干しの励行により、根の健全化を図る</p>	<p>前作物の残さの腐熟化あるいは移植後の高温により、土壤の還元化が進みやすいので、間断灌がいや中干しを行い、ガスの除去につとめ根の健全化を図る。なお、幼穂形成期以後の乾燥は、青立ちの原因となるので、この期間の水管理には特に留意する。</p>
8. 病虫害防除	<p>病虫害予察情報に基づいて適期、適剤防除に努める</p>	<p>(1) 葉いもちの防除 早期防除に努める。</p> <p>(2) 穂いもちの防除 葉いもちの発生程度を考慮し、穂ばらみ後期または穂揃期に防除を行うが、穂ばらみ期を重点に実施する。</p> <p>(3) 紋枯病の防除 穂ばらみ初期（病勢進展期）1回のみとする。</p> <p>(4) 白葉枯病の防除</p> <p>① 幼穂形成期～出穂期の早期発見に努める。下葉に初期発病が認められた場合、直ちに薬剤防除を行う。特に常発地は注意する。</p> <p>② 台風襲来の前も防除する。</p> <p>③ 発病田には、朝・夕の露のあるうちは圃場にはいらない。</p>

項 目	要 点	実 施 内 容
9. 収 穫		<p>(5) ツマグロヨコバイ（萎縮病）の防除 本田初期のツマグロヨコバイを重点防除する。</p> <p>(6) ニカメイチュウ、イネツトムシ、コブノメイガの防除 パダン粒剤で同時防除する。</p> <p>(7) セジロウンカ、トビイロウンカの防除 適期防除に努める。</p> <p>(8) カメムシ類の防除 穂揃期～乳熟期を中心に防除を行う。</p> <p>出穂期後45～50日頃に刈り取る。</p>